

盲導犬協会見学会を通じて

今年の夏、弊社の社員教育プログラムの一つである、日本盲導犬協会神奈川訓練センター主催の盲導犬協会見学会に参加いたしました。見学会を通じて私が、実際に盲導犬を連れている方や盲導犬に触れて感じたこと学んだことをお伝えしたいと思います。



まず、盲導犬とは【目や耳や手足に障害がある方の生活をお手伝いする補助犬の一種で、目の見えない方、見えにくい方の生活をサポートする役割】を担っています。

補助犬の中には、この他に音が聞こえない方、聞こえにくい方をサポートする聴導犬、手足に障害のある方の生活をサポートする介助犬がいるそうです。

では、目の不自由な方が外出等をするためのサポートの仕方にはどのような方法があるのでしょうか？私が今まで実際に見かけたことがあるのは、先端が赤くなっている白い杖（白杖）を使用している方、目の不自由な方と他の方が寄り添って歩いている姿です。実は、私は今回の見学会で初めて盲導犬を連れている方（ユーザーさん）にお会いしました。お会いして一番感じたことは、盲導犬はとてもおとなしい、でもユーザーさんのそばを離れないでしっかり守っているような印象を抱きました。実際にそのユーザーさんと盲導犬は長い付き合いとのことでしたが、お互いの信頼関係が空気感からも伝わってくるようでした。

見学会ではまず、盲導犬に関する基礎知識を教えてくださいました。上に述べたような盲導犬についてや、盲導犬の仕事、またどうやって盲導犬になれるのか、その他にも盲導犬とユーザーさんはどのようにパートナーを決められるのか等々、正直、私が持っている盲導犬に関する知識は学校の教科書に出てくる程度しかなかったもので、実際に盲導犬に接している方やユーザーさんからのお話はとても勉強になりました。特に、盲導犬の仕事に対する私の中での勝手なイメージでは、盲導犬はユーザーさんをどこへでも自分で案内してくれるように思っていたのですが、主な仕事は3つだそうです。

それは【障害物を教えること・段差を教えること・曲がり角を教えること】これらが盲導犬の仕事です。あとはユーザーさんの指示に従い、目的地まで一緒に歩行していく。なので、ユーザーさんが目的地までの道のりを覚えていないと共に歩くのも難しいとのこと。ユーザーさんはその目的地までの地図を頭の中で何度も何度も書き換えては修正して地図を完成させるそうです。一つの目的地にむかってユーザーさんと盲導犬がコミュニケーションをとりながら一緒になって歩いていく、私が感じた信頼関係はきっと、ここから築かれているのだなと思いました。

座学のあとは実際に目の不自由な方と障害物のあるコースを一緒に歩いたり、実際に白杖を使って一人でコースを歩いたり、盲導犬を連れて歩く体験をさせていただきました。

いざ、自分が目の不自由な方を連れて歩くとなったとき、初めてのことで緊張はもちろんですが、どのようにお連れすれば良いかととても不安でした。（しかもまさかのトップバッターでした）。体験の前に、ユーザーさんと盲導犬の実際の歩行を見せていただいたのですが、とてもスムーズで、失礼ながらこの方は実はレーンが見えているのではとってしまうほどでした。



その歩行を見た後だったので、私も盲導犬のように案内すれば良いんだ！と開きなおり、また盲導犬では出来ないことを活かそうと、言葉で情報を伝えながらなんとかコースを終えることができました。ドキドキと不安を感じつつの歩行ですが、なんとか合格点を頂きほっとしました。この時、私が心がけたのはユーザーさんとたくさん話すこと。もちろんこの日が初対面だったので、まずは自分の名前を名乗ること、自分の目的を伝えること（今回は障害物のあるコースを案内しますということ）、また、私がどのような位置にいれば動きやすいですか（どのような方法がやり易いですか）ということです。ユーザーさんは私の立ち位置を指示してくださり、短いコースですが、『ここを左に曲がります、段差があるので一度止まります、うねる道があるので特に注意が必要です』等、私の言葉にもしっかりと耳を傾けて下さいました。実際には私は自分が伝えることに精一杯になってしまい本当に合格点を頂けるような歩行だったのか、不安は残りますが、私にとってはとても貴重な体験でした。

その後、今度は自分が視界を遮られた状況で一人、白杖を持ってコースに出ることになりました。まず白杖自体初めて使うので、杖を左右に振って歩くことにも慣れないですし、どのくらいの幅を自分が振っているか分かりません。また目が全く見えないことも重なり、一気に不安が押し寄せてきました。最初のうちは、平坦な道を歩いているので、杖が障害物にぶつかっても『あ！ここに障害物があるんだな。じゃあこっちの方は空いているかな』などと前に進むことができたのですが、障害物に当たる度にだんだんと視野だけでなく、平衡感覚まで遮られているような感覚に陥り、自分がどこに向かっているのか、コースのどの位置にいるのかが分からなくなり動くことが出来なくなってしまいました。そんな時に指導員の方がもう少し前に進んでみてくださいと声をかけて下さり、その声にとっても安心したのを覚えています。

やっとのことで平坦な道を抜けたと思ったら、今度は段差です。普段なんとはなしに歩いている段差ですら恐怖の対象となってしまいました。一段上がるだけで足が震えてしまい、正直、白杖を持っていることすら忘れかけていましたが、白杖がないと次の段差がどこにあるか分かりません。白杖を使って次の段差との距離を調べます。白杖は左右に振って障害物の有無を確認するだけではなく、白杖をどのくらい伸ばしたら障害物にぶつかるかなど用途が様々であることを知りました。やっとのことでコースを終えましたが、最初にユーザーさんを案内した時とは別のコースのように感じられました。最後は盲導犬を連れての歩行でしたが、一人で歩くのとは全く違う安心感がありました。なにも見えない状況で不安な中、自分を引張って行ってくれる存在がとても頼もしく感じられ、盲導犬の存在力を強く感じることができました。

その後、館内見学を経て、盲導犬ユーザーさんとの質疑応答の時間となりましたが、ユーザーさんのお話の中で、特に印象的だったのは【まずはどういったお手伝いが必要なのかを聞いてほしい】とのことでした。一概に目が不自由といっても個々人で差があるので、その人に合ったサポートが大切とのことでした。

今回の見学会・体験を通じて、お手伝いを必要としている方を見かけたら自分から話しかける勇気を持つこと、またその方がどのようなサポートが必要かしっかりと聞くことが大事だと学びました。普段、盲導犬を連れていらっしゃる方やお手伝いが必要な方にお会いする機会は少ないですが、その場に遭遇した際にはこの日の体験を思い出して、自分ができるお手伝いをさせていただければと思います。

弊社は法人賛助会員として日本盲導犬協会を支援させていただいておりますので、ここで得たノウハウを活かしつつ、オーナー様のご要望やご意見等も頂き、業務に取り組んで参ります。

新百合ヶ丘店 高橋 紀子

